

幼少期の母子関係と青年期の対象関係との関連について ——認知的、投映的レベルからの検討——

樋口 真弓*

The association between the mother-child relationship in early childhood and object relations in adolescence: Studies using cognitive and projective assessments

Mayumi HIGUCHI

This set of studies examined the association between mother-child relationships in early childhood and object relations in adolescence. Cognitive assessment of that association was done using a questionnaire, and projective assessment was done using mother-and-child drawings. In Study 1, quantitative data were analyzed using multiple linear regression analysis (stepwise procedure). Results revealed that an ambivalent mother-child relationship in early childhood was associated with object relations in adolescence involving internal working models that mainly characterized one's relationship to others. In Study 2, interview data were analyzed using a modified grounded theory approach. Results revealed that a mother-child relationship characterized by ambivalent feelings towards one's mother was linked to avoidance or a lack of attachment. A strong mother-child relationship must be formed to satisfy a child's desire to be doted on and feel the warmth of physical touch. In addition, later attitudes towards personal relationships may be altered depending on one's current mother-child relationship or friendships. In addition, mother-and-child drawings were quantitatively and qualitatively assessed in accordance with the methods of Baba (2005). Results indicated that new interpretations provided deeper insight into a subject's inner world.

Key words : mother-child relationship, internal working models, object relations, mother-and-child drawings

母子関係, 内的作業モデル, 対象関係, 母子画

1. 問題と目的

近年, 子どもの心の臨床だけでなく, 青年や成人の心の臨床においても盛んに取り上げられているのが「アタッチメント」(Bowlby,1969;黒田他訳,1976)の重要性であり, 乳幼児期早期の親子関

係の質がその後の発達成長を大きく左右するものとして認識されてきている(小林・遠藤, 2012)。自己や他者とどのような心的関わりを持ち, その関わりの中でさらに自己と他者をどのように見出すのか, といった自己や他者及び世界観の形成, または関係性の形成に関する根本的問題を考えようとするとき, 母子という二者関係を基盤として想定することができる。母子関係の重要性を訴える学術者の一人として, D.W.ウィニコット(D.W.Winnicott)は「一人の赤ちゃんというものは

* まゆみ ひぐち 文教大学大学院人間科学研究科
臨床心理学専攻修士課程修了生

いない、赤ちゃんはいつも誰かの、つまりお母さんの一部なのである」という言葉を残している。D.W.ウィニコットによると、早期の乳児の心は「母親 - 乳児というユニット mother - infant unit」の形で成立しており(小此木・渡辺, 1989), 人生における最早期の関係は母子間にみられる(藤井, 2010)と言える。

アタッチメントとは、「子の主要な養育者に対する情緒的絆」(Bowlby, 1969; 黒田他訳, 1976)であり、その主たるアタッチメント対象者である母親との早期の相互作用、対人的経験によって形作られるとされている。そして、Bowlby(1969; 黒田他訳, 1976)はアタッチメント対象との間の具体的な体験によって形成された内的表象、すなわち内的作業モデル(Internal Working Models: IWM)が対人認知的枠組みとなり、他者への態度を形成すると考えた。IWMの実証的研究はAinsworthら(1978)によって発展し、その後の対人関係に影響を与えるという結果が多く示されてきた。特に、否定的な自己表象に基づいて、歪んだ情報処理を行うIWMが後の精神病理へのリスクを高めると考えられ(Bowlby, 1973), アタッチメントの視点から精神的健康やパーソナリティとの関連を検討した研究(Fonagy et al., 1996; Cole-Detke & Kobak, 1996; Dozier et al., 1999)が活発になってきている(数井・遠藤, 2005)。

対人関係の問題は個人の心理的適応を考える上で重要な要素の一つであり、他者との関係性は人格形成において重要な意味を持つ(井梅, 2011)。このような個人の適応を考える上での対人関係の在りようについて、精神分析的観点からは、対象関係という概念で扱われている。現実世界での対人関係は内的世界における対象との関係、すなわち対象関係が投影されて形づけられ(松木, 1996), 対象関係の形成には幼少期の養育者との関係性が深く関与している(Kernberg, 1976)と考えられている。このように、対象関係論とIWMの考えは、内的表象を扱う点や、早期母子関係にまつわる内的表象を重視する点において共通点が多い。我々が内面に持っている他者に関する表象(対象表象)と、自己に関する表象(自己表象)は、幼少期の実際の人との関係性を通して形成さ

れ、自己と他者との関係性についての表象(対象関係)として個人の内に定着する。このように形成された対象表象は、幼少期の養育者との関係だけではなく、その後の人間関係において修正され、より適応的なものへと成熟していき(井梅ら, 2011), 内界の自己と対象の関係が投影されて現実世界での対人関係が形作られている(松木, 1996)と考えられている。

井梅(2011)は、「青年用対象関係尺度」(井梅ら, 2006)を用いて、幼少期および現在の母親との関係が対象関係に及ぼす影響について検討し、その関連性を見出している。質問紙によって対象関係を評価できるものは数少なく(井梅, 2011), 「青年用対象関係尺度」は客観的指標として対象関係の理論を扱うことができると期待される。また、現在のアタッチメント関係は、親密な関係を指すが、対象関係は「対人場面における個人の態度や行動を規定する」(小此木ら, 2002)内的表象であり、特定の対象でなく、広く対人関係を規定すると捉えることができる。それ故、個人の心理的適応感を対人関係の問題から、より捉えやすくなるだろう。

一方、北川(2006)は、アタッチメントの測定手法の概観を論じた上で、質問紙法のみではIWMにおける情報を処理する際の結果を測定しているだけであり、情報処理過程そのものの情報は得られないと指摘している。そもそも、「IWMの働きとは、事実や経験そのものを正確に認知する働きではなく、それに対してどのように目を向けているのかという働きを扱うため、質を検討することが重要である」(松下・岡林, 2009)と考えられている。すなわち、IWMの研究では、過去の体験を解釈し、理解し、意味づけしながらどのように言葉にしていくかという観点が求められる。

以上の知見から筆者は、現在から過去の体験を振り返った時に、どのようなイメージとして想起されるか、過去の経験を現在の時点からどのように捉えていくかをつかむことが必要であると考えられる。よって、IWMの質を検討するためには、質問紙法という客観的指標に加えて、無意識的観点を取り入れた投映法を用いることが有効であると

考えた。

ここで、無意識的観点を見出していくものの一つとして、対象関係論を理論背景とした母子画(mother-and-child drawings)が挙げられる。「母子画の母子像が内的世界の自己と対象を、母親像と子ども像の交流が自己と対象の交流を象徴し、そしてそれが投影されたものが現実の対人関係である」(馬場,2005)と考えられ、描画者の対象関係を読み解くことが期待されている。母子像のさまざまな側面に、心的現実としての自己性と他者性及び、その関係が表現されているといえ、それらを読み取ることで対象関係を理解することができると考えられる(松下・岡林,2009)。馬場(1997;2005)は母子画の基礎的研究を重ね、母子画の描画パターンの表現型を数量化し、その出現頻度から、標準・準標準・非標準パターンを見出し、分析指標として形態・サイズ・表情・身体接触・アイコンタクト・交流パターンを設定し、臨床的研究にも応用している。母子画の信頼性については、馬場(2005)によって、再検査法によりその信頼性が確認され、構成的文章完成法(K-SCT)や東大式エゴグラム(TEG)等の心理検査と併せて母子画を評定することで母子画の妥当性が検証された。その結果、母子画の解釈仮説(馬場, 2005)が提案された。また、馬場(2003)は大学生を対象に「母子画には個人の対象関係が投映される」という仮説を検証するために、成人版アタッチメントスタイル尺度を用いて個人の内的作業モデルを測定し、それが母子画にどのように表現されるかを検討した。そして、「アタッチメント対象との絆が母親像と子ども像の“身体接触”や“交流”という形で表現され個人の対象関係が母子画に投影される」(馬場, 2003)ことが示唆された。

しかし、より描画者の内的世界に近づくためには個別的な解釈を行うことが必要であると考えられる。母子画の基礎的研究は未発展であり、母子画を個別に検討し、母子関係と対象関係について取り上げている研究は少ない。母子画を個別的に解釈することによって、投映された幼少期の母子関係と対象関係を質的に検討することができると同時に、より内的世界に近づいた解釈仮説を提案することが期待できるだろう。以上のことから本研

究では、幼少期の母子関係と青年期の対象関係について、質問紙を用いた認知的レベルと、母子画を用いた投映的レベルから検討することを目的とする。第一研究では、幼少期の母子関係及びIWM、そして青年期の対象関係の関連について質問紙を用いて量的に検討を行った。第二研究では、面接調査で得られたデータから幼少期の母子関係と青年期の対人関係のプロセスについて分析・考察を行い、質的データと併せて、母子画に投映される母子像の関係性から個人の母子関係と対象関係の関連について質的研究を行った。

2. 第一研究—量的研究—

2-1. 目的

第一研究の目的は、幼少期の母子関係と青年期の対象関係との関連について認知的レベルから検討することである。ここで、幼少期の母子関係を基にIWMが形成され、そのIWMによって現在の対象関係の在り方が規定されるということをも前提としている。これは、幼少期の母子関係を基盤として、その後の対人的経験や自己に関する経験を通して修正・加工され、形成されたものであると考えた。

2-2. 方法

対象者：大学生および大学院生243名(男性77名, 女性166名), 平均年齢は20.36歳(SD=1.74, Range=18~29)。

調査時期：2012年6月~7月。

使用尺度：(1)「幼少期の母子関係尺度」(酒井, 2001), 3因子16項目。これは、Ainsworth(1978)がアタッチメントスタイルの型として安定型・回避型・アンビバレント型の3因子を想定した9項目を青柳・酒井(1997)が翻訳したものに、酒井(2001)が新たな項目を加えた16項目である。①「就学前の安定的な母子関係」因子は就学前の良好な母子関係を反映する項目, ②「就学前の拒否的な母子関係」因子は、母親の無関心さや拒否の内容を反映した項目, ③「就学前のアンビバレントな母子関係」因子は母親への依存傾向を反映した項目であると考えられている(酒井, 2001)。

調査対象者に小学校入学以前、すなわち0～6歳の母親と自分との関係を回想させて回答してもらった。(2)「Internal Working Models尺度」(戸田,1990),3因子18項目。①「安定型」因子は、「自分は受容される存在である」といった内容のモデルを形成するため、他者の振る舞いに確かな見通しを持つことができ、アタッチメント行動が全般的に安定していることを示す。②「回避型」因子は、「自分は拒絶される存在である」という内的作業モデルを形成し、あえて他者への関わり行動を最小限度に抑え込む、回避的な振る舞いをする傾向を表す。③「アンビバレント型」因子は、「自分はいつ見捨てられるかわからない」といった内容のモデルを形成しやすく、他者の動きにいつも過剰なまでに用心深くなり、他者に対ししがみつきのような依存性を表す。(3)「青年期用対象関係尺度」(井梅ら,2006),5因子29項目。①「親和不全」因子は対人的なやり取りにおいて自ら壁を作り、緊張して打ち解けられない、また、深く付き合うことに恐れがあることを指す。②「希薄な対人関係」因子、すなわち「不安定で希薄な対人関係」は他者に対する評価が安定せず、相互理解やサポート享受など実質的な中身を伴う対人交流ができないことを指す。③「自己中心的な他者操作」因子、すなわち各人の「自己中心性」は自分が優れているという独善的な思いがあり、自分のために他者が動いてくれることを当然と考える。また、自分の欲求を実現するために他者を操作的に利用しようとすることを指す。④「一体性の過剰希求」因子は他者との心的距離が過度に近く、自分の要求や行動が相手と100%共有されるはずだと思い、そのような相手を求めることを指す。⑤「見捨てられ不安」因子は親しい人から拒絶されることに対する恐れが強く、相手の反応に敏感であることを指す。以上、5件法で回答を求めた。

2-3. 結果及び考察

(1) 各尺度における因子構造・信頼性の検討

まず3つの尺度について因子分析と信頼性を検討し、信頼性の保たれた項目及び因子構造を採用し分析を進めた。1)「就学前の母子関係尺度」は

酒井(2001)に倣い、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行い、先行研究(酒井,2001)と同様の因子のまとまりがみられた3因子構造を採用した。さらに十分な因子負荷量および内容的妥当性、信頼性の保たれる13項目を採用し、①「幼少期の安定的な母子関係(以下、母子安定)」($\alpha=.813$)、②「幼少期の拒否的な母子関係(以下、母子拒否)」($\alpha=.770$)、③「幼少期のアンビバレントな母子関係(以下、母子両価値)」($\alpha=.659$)とした(累積寄与率44.32%)。2)「Internal Working Models尺度」は戸田(1990)に倣い、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、先行研究(戸田,1990)と同様の因子構造がみられた3因子18項目を採用し、①「安定型(以下、Secure)」($\alpha=.837$)、②「アンビバレント型(以下、Ambivalent)」($\alpha=.764$)、③「回避型(以下、Avoidant)」($\alpha=.673$)とした(累積寄与率40.38%)。3)「青年期用対象関係尺度」は井梅、馬場ら(2006)に倣い、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。十分な因子負荷量および内容的妥当性、信頼性の保たれる5因子26項目を採用し、①「見捨てられ不安(以下、見捨て不安)」($\alpha=.846$)、②「親和不全」($\alpha=.818$)、③「一体性の希求(以下、一体希求)」($\alpha=.774$)、④「希薄な対人関係(以下、関係希薄)」($\alpha=.743$)、⑤「自己中心的な他者操作(以下、自己中心)」($\alpha=.748$)とした。

(2) 対象関係と各変数との関連

相関分析の結果(Table.1)からは、幼少期の母子関係及びIWMと対象関係の間に概ね相関関係が確認された。幼少期の母子関係と対象関係の関連については、「幼少期の安定的な母子関係」と「希薄な対人関係」、「親和不全」に有意な負の相関があることから、安定的な母子関係をもつ人は対人関係においても満足のいく親密な対人関係を築けていることが考えられた。「拒否的な母子関係」では、「希薄な対人関係」と「見捨てられ不安」に有意な正の相関がみられたことから、母親との間で拒絶された体験をした人は傷つきを避けるために親密な対人関係を避け、あるいはいつか拒絶されることを恐れてしがみ付くような態度を取る

ことが考えられた。「アンビバレントな母子関係」では「一体性の過剰希求」と「見捨てられ不安」に有意な相関がみられ、アンビバレントな母子関係をもつ人は自分と他者との境界が曖昧で、統合されない両価性の中に不安を抱きながら他者を執拗に求めることが考えられた。

現在のIWMと対象関係の関連については、「Secure」では、「安定的な母子関係」と同様に「親和不全」と「希薄な対人関係」にある程度強い負の相関がみられた。「Ambivalent」では「見捨てられ不安」、「親和不全」、「希薄な対人関係」、「一体性の過剰希求」に有意な正の相関がみられ、他者の動きに過剰なまでに用心深くなり、親密な対人関係を築くことが困難である他、他者に対ししがみつきのような依存性を持つことが示唆された。「Avoidant」では「親和不全」、「希薄な対人関係」、「自己中心的な他者操作」に有意な正の相関がみられた。このことから、回避的なIWMを

持つ人は、近接行動を受け入れてもらえない不安や、好意を抱き信頼しても裏切られて一人にさせられてしまう不安を根底に抱いており、自己と他者を尊重した関係性を築き辛いことが考えられた。

(3) 対象関係に及ぼす影響

対象関係を従属変数、幼少期の母子関係とIWMを独立変数として重回帰分析(ステップワイズ法)を行った(Table.2)。その結果、青年期の対象関係には幼少期の両価的な母子関係と各IWMのスタイルが要因となり、他者との関係性を特徴づけていることが明らかにされた。

特に、「見捨てられ不安」は、「Ambivalent」なIWMと幼少期の「両価値」な母子関係の影響が示され、見捨てられ不安という不安定な依存的態度は、母親を求めしがみつくといったアンビバレントな幼少期の母子関係や、「本当は私と一緒に

Table. 1 各下位尺度間の相関関係

	Secure	Ambivalent	Avoidant	母子安定	母子拒否	母子両価値	見捨て不安	親和不全	一体希求	関係希薄	自己中心
Secure	-	-.405**	-.203**	.166**	.008	-.017	-.190**	-.601**	.090	-.412**	.192**
Ambivalent		-	.224**	-.216**	.227**	.084	.667**	.518**	.238**	.317**	.046
Avoidant			-	-.292**	.241**	-.081	.168**	.481**	-.042	.365**	.338**
母子安定				-	-.546**	.225**	-.017	-.203**	.005	-.393**	-.155*
母子拒否					-	0.114	.250**	.175**	.136*	.315**	.185**
母子両価値						-	.277**	.150*	.300**	0.045	-.102
見捨て不安							-	.472**	.450**	.263**	.107
親和不全								-	.156*	.474**	.038
一体希求									-	.097	.271**
関係希薄										-	.066
自己中心											-

**p<.01, *p<.05

Table. 2 重回帰分析結果

	見捨て不安	親和不全	一体希求	関係希薄	自己中心
	β	β	β	β	β
Secure		-.424 **	.218 *	-.342 **	.272 **
Ambivalent	.649 **	.350 **	.303 **		
Avoidant		.255 **		.201 **	.393 **
母子安定				-.186 *	
母子拒否				.168 *	
母子両価値	.222 **	.150 *	.278 **		
R ²	.494 **	.578 **	.175 **	.341 **	.185 **

*p<.01, **p<.001

β : 標準編回帰係数

居たくないのではないかと心配になる」などといったアンビバレントで自信のない信念に影響を受けていると考えられた。「親和不全」と「希薄な対人関係」については、相手への基本的信頼感に欠け、安定した人間関係が築けない共通点を見出すことができる。一方で、「親和不全」の打ち解けた関係を築けないことの根底には「深く関係を築きたい気持ちもあるが、仲良くなるのが怖くて壁を作ってしまう」といったアンビバレントな感情が存在している可能性が示唆された。よって、「希薄な対人関係」の、親密な対人交流ができない背景には、幼少期における母親からの無関心さやアタッチメント行動を拒否された経験、「自分は拒絶される存在である」という信念を持つが故に、あえて他者への関わり行動を最小限に抑え込む、回避的な振る舞いをとる傾向があることが考えられた。「一体性の過剰希求」は、「Secure」なIWM、「Ambivalent」なIWM、幼少期の「両価値」な母子関係に影響力があることが示された。両価的な母子関係という不安定さ故に他者にしがみ付き、対象の過剰希求に繋がると考えられ、自己が他者と独立した人格で確立していないという点が示唆された。最後に、「自己中心的な他者操作」は、現在のIWMによる影響が強いことが示された。自己に対する肯定的な信念と逆に回避的な信念が関連していることから、他者との関係の中で自分に自信があると同時に深く関わろうとせず、自分の都合の良いように行動する傾向の影響が示唆された。

3. 第二研究—質的研究—

3-1. 目的

面接調査の結果から幼少期の母子関係と青年期の対人関係のプロセスを明らかにすること、そして母子画の結果と面接調査の結果を照らし合わせ、母子画への投映を通して、対象関係のあり方を明らかにすることを目的とした。

3-2. 方法

対象者：第一研究協力者の中から大学生と大学院生1名の計19名(男性6名、女性13名)、平均年齢

20.8歳(SD=1.44, Range=19~24歳)。

調査時期：2012年7月~10月。

実施方法：約90分の間に母子画の実施と半構造化面接を行った。母子画の実施は馬場(2005)に従って行い、さらに描画後の質問(Post Drawing Interrogation: PDI)を半構造化面接の冒頭に取り入れた。

分析方法：面接内容は木下(2007)の修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)を用いて質的分析を行い、母子画の分析は馬場(2005)による分析指標、母子画記録票を用いて行った。馬場(2005)は、分析指標として描画指標(母子像の種類、子ども像の人数、形態、サイズ、表情、身体接触、アイコンタクト)、PDI指標(子ども像の性別、年齢、母子の行為、親しみを感ずる対象、考えていること)を設定した。そして、描画指標における母子像の表現型からは標準型・準標準型・非標準型のどれに該当するのかを把握することができる。更に母子画記録票において、表情・身体接触・アイコンタクトの描画パターン及びそれに基づく母子画得点を換算でき、母子画得点の結果から「安定/不安定」の関係性が目安として把握できる。加えて、面接の内容と母子画の個別的な検討を行った。

3-3. 結果及び考察

【1】面接内容のM-GTAによる分析結果及び考察

調査協力者19名の中から13名を分析焦点者とし、指導教員1名、及び臨床心理学専攻の大学院生5名を分析協力者として分析を行った。複数名で結果を検討するというトライアングレーションを導入し分析を行い、結果の信頼性と妥当性は保たれているものと判断した。カテゴリーと概念の関係性を記している結果図(以下、結果図)(Fig.1)とストーリーラインを次に示す。

注1：結果図、ストーリーラインでは以下の表記を用いている。

カテゴリー名：中カテゴリー< >, 大カテゴリー<< >>, 概念名：【 】, 逐語データ：「 」, 発言者：()。

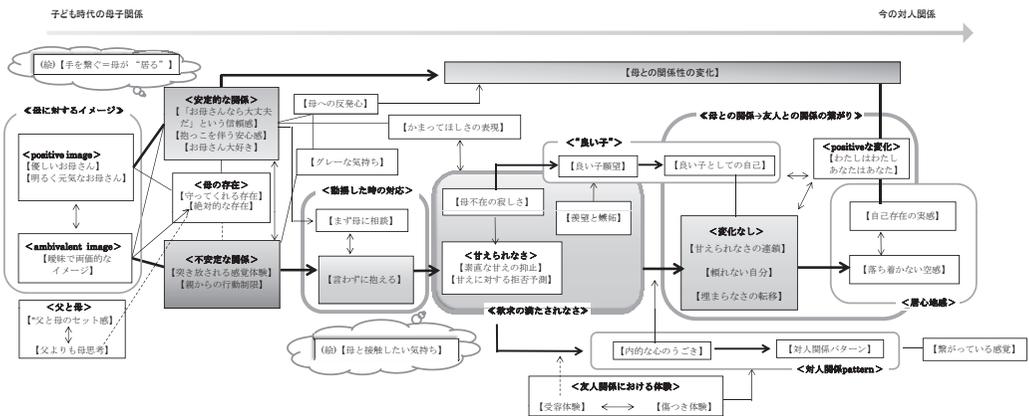
注2：結果図における矢印や単線は以下の意味で用いている。

A → B： A から B への関係。 A -> B： A から B への想定される関係。

A <> B： A と B の対極関係。 A - B： A と B の相互関係。

☁️： 母子画に投射されたと考えられる概念との関係。

Fig.1 結果図



<positive image>は<安定的な関係>や、<母の存在>を【守ってくれる存在】や【絶対的な存在】として認識していることと関係している。そして、<ambivalent image>は<不安定な関係>と、特に【お母さん大好き】、【絶対的な存在】と関係している。これは、母親に対して<ambivalent image>を持っている人の中に、「しがみつくほど」「お母さんが大好き」、「自分の中の全て」と答える者があり、【絶対的な存在】の中に信頼を意味するものと、「しがみつки」といった不安定な要素も含まれていると考えたためである。また、母親を【絶対的な存在】と認識することには、【父よりも母】と相互関係があると考えられる。これは、「両親の離婚や離別を想定した際に、「父よりも」「母の方」から離れたくないという気持ち強いこと」であり、母親が【絶対的な存在】、すなわち「いなきや無理」な人であるという認識と関連すると考えたためである。ここで、対極的なカテゴリーである<安定的な関係>と<不安定な関係>について、それぞれの流れに沿って、述べていく。

i) 安定的な関係

<安定的な関係>は、<動揺した時の対応>として【まず母に相談】することができ、かまってほしい時には、その【かまってほしい表現】をすることができる。また、<安定的な関係>を基盤として、子どもは成長と共に【母への反発心】を抱き、時にそれを主張し表現することができる。そして、母親と<安定的な関係>をもつ子ども、または【母への反発心】を経た子どもは、成長と共に、【母親との関係性の変化】が徐々に生じる。

さらに、こうした【母との関係性の変化】は青年期になって、友人関係の<positiveな変化>と繋がりを見せた。<positiveな変化>とは【わたしはわたし、あなたはあなた】という概念を便宜上言い換えたものであり、【わたしはわたし、あなたはあなた】は「母との関わり方が変化することによって、友人とのかかわりにも変化が起こること、母にとっての良い子ではなく「私は私」と思えるようになり、友人関係でも関わり方が変わったこと」を意味している。こうした「わたし

はわたし」という感覚は、＜居心地感＞における【自己存在の実感】とも関連していた。そして、【自己存在の実感】は、＜positiveな変化＞をした人だけでなく、安定的な関係を維持してきた人の対人関係における居心地の良さに繋がらうものであったといえる。

なお、こうした＜安定的な関係＞は、母子画の中で、“手を繋ぐ”母子像と表現され、母親が“居る”安心感や母親からの愛情を感じられていることを象徴すると考えられたため、【手を繋ぐ＝“居る”】と関係しているとした。

ii) 不安定な関係

これに対して、＜動揺した時の対応＞で【言わずに抱える】ことが＜不安定な関係＞と関連していると考えた。また、同時に＜不安定な関係＞は【グレーな気持ち】とも関連し、こうした不安定な気持ちを根底に【母への反発心】を抱くこともある。

そして、＜不安定な関係＞を持ち、【言わずに抱える】子どもは、＜欲求の満たされなさ＞における＜甘えられなさ＞につながると考えられる。したがって、＜甘えられなさ＞などを抱く人は【かまってほしさの表現】をすることは難しいと言えるだろう。

＜甘えられなさ＞のもう一つの背景となる【母不在の寂しさ】や、【羨望と嫉妬心】は、＜“良い子”＞カテゴリーの中の【良い子願望】につながる。そして、子どもの時に母親の前では“良い子でありたい気持ち”が強かった人は、青年期になっても母親に対して、あるいは友人関係のなかでも“良い子でありたい”気持ちをもち続ける場合【良い子としての自己】が形成されていると言える。

＜変化なし＞は、母子関係のあり方が対人関係と繋がっていることの中で、平易な言葉を使用するなら、母子のネガティブな関係から対人関係でもネガティブな要素を引きずっており変化なく繋がっていることを指し、その内容は、＜不安定な関係＞→【言わずに抱える】→＜欲求の満たされなさ＞の将来を予測できるものである。そして、子ども時代に満たされなかった欲求は友人関係の

中で求めても埋まることがないと体験された時の虚しさや、今の自分の未解決な課題となり友人関係の中でその壁に直面した時に感じられる、居心地の悪い“感じ”及び“空間”を指す【落ち着かない空感】につながっていた。

この時、＜欲求の満たされなさ＞から母親との関係が友人との関係の中でも再現される＜変化なし＞につながるラインを支えるものとして＜対人関係pattern＞がある。これは、＜欲求の満たされなさ＞に属するような、【母不在の寂しさ】や【羨望と嫉妬心】、＜甘えられなさ＞の体験などの母親との関係を基盤として形成されたものであると考えられ、【内的な心のうごき】が形成される。そして、【内的な心のうごき】に基づいて形成された、自分の取りやすい行動や思考の傾向として【対人関係パターン】となると考えた。

また、面接の中で、＜母親との関係と友人との関係の繋がり＞を振り返る者は、【繋がっている感覚】を面接の中で報告していた。しかし、＜対人関係pattern＞は母親との関係性だけでなく、＜友人関係における体験＞からも影響を受けるといえる。＜友人関係における体験＞には、【受容体験】と、【傷つき体験】という対極的な概念が含まれている。“友人との間に経験した、自分の対人関係の中での未解決の問題をサポートしてくれるようなポジティブな体験”，すなわち【受容体験】は、＜欲求の満たされなさ＞から＜対人関係pattern＞への負のラインに対しては、より安定的な関係性へと変化をもたらす可能性のある刺激体験となる。逆に、【傷つき体験】は安定的な母子関係を体験していても、対人関係において自己防衛を強化させるような刺激体験となると言える。

最後に、主に＜欲求の満たされなさ＞を母子画に投映されたものが身体接触の意味づけにおける【母と接触したい気持ち】であると考えた。これは、“特に、母親との身体接触や交流を希求する気持ちや理想が投映されたもの”であると考え、＜欲求の満たされなさ＞が理想や願望として身体接触に表現されたことを示した。

以上のように、安定的な母子関係よりも不安定

な母子関係の方が現在の対人関係の在り方とのつながりを見せ、特に母に対するアンビバレントなイメージに発する母子関係が、回避的な関係性や深く関わることができない親和不全に繋がるという特徴が明らかにされた。幼少期の母子関係においては子どもからの「甘え」の行動を表現したい気持ちが満たされることと、母に甘えたい気持ちが満たされることや、身体接触による温かさが安定的な関係を形成するために求められると考えた。また、現在の母子関係や友人関係の体験によって関係性の持ち方の変化があることも明らかにされ、青年期の対象関係は幼少期の母子関係を基盤とし、他の影響も受けながら変化し得る可能性があることが示唆された。

考察 1. 安定的な母子関係のプロセス

(1) 安定的な母子関係と対人関係のつながり

<安定的な母子関係>をもつ人は悩んでいる事や嫌だったことなどを【まず母に相談】することができ、安全基地としての機能、甘えの対象としての機能を十分に果たしていると考えられる。かまってほしい時には、その【かまってほしさの表現】をすることができることもまた、母への接近を快く受け容れられる経験の積み重ねがあることを示唆できた。基本的な信頼感を心の拠りどころにして、周囲の環境に働きかけ、環境との相互作用を通じ、豊かな心情、意欲、態度を身につけ、新たな能力を獲得するとともに、自己の主体性と人への信頼感を形成していくと考えられる。

また、母親と<安定的な関係>をもつ子ども、または【母への反発心】を経た子どもは、成長と共に、【母親との関係性の変化】が徐々に生じることが示された。つまり、母親を信頼して言うことを聞いていた時期から、「自分の意見」を持つようになり母親から少しずつ離れ、母親を一人の人間として、あるいは「対等」な関係として見るができるようになると言える。こうした、関係性の変化は発達段階にふさわしい生活や活動を十分に経験することができたことを示していると考えられる。

(2) 手を繋ぐ=“居る”ことと母の温もりについて

そして、こうした<安定的な関係>は、母子画の中で、“手を繋ぐ”母子像と表現され、母親が“居る”安心感や母親からの愛情を感じられていることを象徴すると示した。本研究における<安定的な関係>は信頼感や抱っこを伴う安心感、母親に対する「大好き」という愛情によって構成されているが、特に抱っこを伴う安心感については、身体的な温もりによって安心感を得られる側面も含んでいる。ここで、数井・遠藤(2005)はアタッチメントと温かさについて論じており、ハーロウ(Harlow, H.F.)によるアカゲザルの乳児を扱った一連の実験において、毛布製の模型以上に針金製の模型から温風が出る仕組みの模型の方が、より子ザルが接近する傾向が認められていることを呈示し、これは「アタッチメントが求温欲求の充足と密接な関連を有していることを如実に物語っている」と述べた。

また、数井・遠藤(2005)は、Field(2001)によって他個体との皮膚接触(touching)そのものが神経生理学的システムに直接的に作用し、心身の各種発達を促進するということが明らかにされたことを受け、「幼若な個体が他個体との近接関係を希求する背景」について考察を深めているが、ここでもやはり安定的なアタッチメントの形成には子どもを抱きかかえ、温める養育者の存在が必須になると考えられる。

以上のように、身体接触とアタッチメントは重要な関連を持ち合わせており、母親との身体接触を通して感じられた母親の温もりや安心感、愛情によって築かれた安定的な母子関係の在りようが母子画の中で表現されたと言える。また、そうした母親との皮膚感覚の記憶は幼少期の母親との経験や関係性を想起させる重要なツールであると考えられた。

考察 2. 不安定な母子関係のプロセス

(1) 不安定な母子関係と対人関係のつながり

<不安定な関係>を持ち、母親との間で<<欲求の満たされなさ>>や【言わずに抱える】ことの経験を積んできた人は、対人関係においても、甘えられなかったり、頼れなかったりして、母親との

間で満たされなかったものを対人関係の中で求めることが示された。これは、井梅(2011)の「幼少期のアンビバレントな母子関係は、より直接的に対象関係の在り方に関連する」ことから支持された。従って、〈対人関係pattern〉は、【母不在の寂しさ】や【羨望と嫉妬心】、〈甘えられなさ〉といった「欲求の満たされなさ」の体験などを基盤として形成されたものであると言える。

しかし、〈対人関係pattern〉は母親との関係性だけでなく、〈友人関係における体験〉からも影響を受けるといえる。親密な対象が母親から友人へ移行する青年期前期において、友人関係における体験は、その後の対人関係の在り方に重要な影響を与えることを示している。すなわち、本研究において、母子関係と対人関係の繋がりとともに、友人関係における体験によって〈対人関係pattern〉が構築される、あるいは変化する可能性が示唆された。

(2) 母子関係と甘え

アタッチメントと甘えは一見すると乳幼児期早期の母子関係における同じような現象を扱っているように見える一方、それぞれ異なる視点を持つものとして区別されているが、小林・遠藤(2012)はアタッチメントと「甘え」について論考を深めている。アタッチメントとは「危機的な状況に際して、あるいは潜在的な危機に備えて、特定の対象との近接を求め、また、これを維持しようとする個体の傾性」(数井・遠藤, 2005)であり、恐れや不安といった「ネガティブな情動状態を他の個体とくっつくあるいは絶えずくっつくことによって低減、調節しようとする行動システムのこと」(数井・遠藤, 2005)である。そして、こうした近接関係を維持・確立することによって、安全である感覚を確保しようとしているのである。ここで、不安や恐怖という不快な情動が親密な他者に近づくことによって中和されるか、快の情動へと変化していくことが勘所であり、不快な情動を体験した際に近接行動を起動させることができるかどうか重要な点としてあげられるだろう。そして、甘えについて土居(1993)は「『甘え』はまず一義的には感情であり、この感情は欲求の性

格を持ち、その根底に本能的なものが存在する」と述べている。また、「『甘え』は『甘える』の動名詞として『甘える』心のうごきが如何様にせよ働いている場合をさす」(土居, 1998)と考えられ、原型は乳児が母親に求めることにあるとする。つまり、対象関係を求める原始的衝動である。

さらに、小林・遠藤(2012)は「甘え」が享受できるか否かは相手次第だと述べている。甘えることができるのは、甘えを受け止め、甘えさせてくれる人がいるからであって、一人で「甘え」を充足することはできない。それゆえに甘えの相手がどのような状態にあるかを考えなければならず、必然的に二者関係を問題にすることとなる。したがって、子どもは「甘え」を享受しようとするれば、母親との間でさまざまな策略を講じなければならないこともあり、「アタッチメント・パターンとして知られているさまざまな子どもの行動は「甘え」を享受するための子どもの懸命な努力の現れとしてとらえることができるかもしれない」(小林・遠藤, 2012)。「甘えたくても甘えられない」状況に置かれた子どもたちがこの事態を潜り抜けるための努力が【良い子願望】であるのではないだろうか。

「甘えたいけど甘えられない」、こうしたアンビバレンスを持ちながら、「甘えたい」気持ちを表現する欲求は満たされないが、「甘えたい」気持ちを満たされたい欲求は持続しているために、常に相手の顔色を窺うことになりかねない、ということが考えられる。アンビバレンスを背負い込むことによって、その個人の対人関係の在り方を身につけることになると言える。あえて甘えない背景には、これ以上傷つくことを避けるための自己防衛であり、回避型の世界で生きてきた人の適応であるのだと考えた。そして、こうした適応を維持してきた人が対人関係においても自己を守る術として【甘えられなさの連鎖】や【頼れなさ】があるのだろう。

【2】母子画の結果及び考察

(1) 全体的分析結果

ここでは、母子画の種類・形態・サイズ・表情・身体接触・アイコンタクトの描画指標の分析、母

子画得点の分析, その他に年齢などについて分析を行った。以下に, 各表現型の度数と人数比 (Table 3), 母子画得点の度数と人数比 (Table 4), その他の結果 (Table 5) を示す。各描画指標の中で, もっとも頻出した表現型は, 種類で「人間」, 形態で「母子全身」, サイズで「普通」, 表情で「笑顔」, 身体接触で「手を繋ぐ」, アイコンタクトで「なし」であった。これらは, 馬場 (2005) による表現型の分類における「標準型」にすべて一致する結果であった。また, 早期の対象関係が母子画に投映されるのであれば, 描かれる子ども像は乳幼児として表現される可能性が高い (馬場, 2005) と言われている。本研究においても, 馬場 (2005) と同様に子ども像で幼児 (2~6歳), 母親像で30~34歳が最も多く表現され, 「お母さんと子ども」という教示からは「お母さんと幼児」の姿をイメージしやすいことが明らかにされた。この結果により, 本研究からも母子画に幼少期の対象関係が投映されることが支持された。

Table 3 描画指標の結果 (標準型: *, 非標準型: **)

描画指標		度数	人数比 (%)
種類	人間	18	94.7
	動物**	1	5.3
形態	全身	16	84.2
	母半身・子全身*	2	10.5
	半身*	1	5.3
サイズ	普通	13	68.4
	母(大)、子(普)*	2	10.5
	母(普)、子(小)*	1	5.3
	母子(大)**	3	15.8
表情	笑顔	11	57.9
	母笑顔・子非笑顔*	3	15.8
	非笑顔*	2	10.5
	空白の顔*	1	5.3
	母子後ろ姿**	2	10.5
身体接触	手を繋ぐ	9	47.4
	抱く*	4	21.1
	非接触*	5	26.3
	母からの接触**	1	5.3
アイコンタクト	なし	14	73.7
	母⇄子*	3	15.8
	母→子*	2	10.5

Table 4 母子画得点の分析結果

	度数	人数比 (%)
やや安定	5	26.3
普通	12	63.2
やや不安定	2	10.5

Table 5 その他の結果

		度数	人数比 (%)
異性	女性が男性像	2	10.5
	男性が女性像	0	0.0
複数の子	2人	1	5.3
子の年齢	乳児(2歳未満)	2	10.5
	幼児(2~6歳)	10	52.6
	児童(7~12歳)	5	26.3
	思春期(13~17歳)	1	5.3
	青年期(18歳以上)	1	5.3
母の年齢	25~29歳	1	5.3
	30~34歳	8	42.1
	36~39歳	3	15.8
	40~44歳	4	21.1
	45~49歳	2	10.5
	50歳以上	1	5.3

種類, 形態, サイズについては, 馬場 (2005) と同様の結果が得られ, 非標準タイプの母子像は慎重に扱い, 描画者の心の内容を十分に理解する姿勢が必要であると言える。

子ども像の性別では, 子どもを持たない成人が, 「母親と子ども」を描こうとする時, 意識的には自分の子ども時代や自分の母親が頭に浮かび, 自分と同性の子どもを描くことは自然なことと言える。また, 描画者の対象関係が母子画に投映されるのであれば, 母子画の子ども像は描画者と同性の子ども像が描かれる可能性が高いと考えてよいだろう。従って, 異性の子ども像を描く場合は, 何らかの意味を検討する余地がある。しかし, 高橋・高橋 (2010) は「青年期の女性が異性像を先に描くのはそれほど問題にならない」と述べており, 青年期の男性が異性を描く場合には, 特に注意して解釈を行うべきであると考えた。

母子画得点の評定について, 馬場 (2005) による設定では, 形態が顔のみであったり, 隠れていたりする場合や, 母子画の種類が動物だった場合の検討が含まれていないが, 点数化によって目安を設定する場合は, 表情と交流パターンのみならず, その他の描画指標を含めた総合的な評定が有効となるだろう。また, 安定的な母子画が描かれる傾向については, 確かに描画者の母子関係や対象関係を表象した結果であると考えられるが, 母子像が描画者の理想像や願望が影響しているのではないかと考えた。これは, 面接の中で「理想的な親子像を描いた」や, 「母と2人ということがなかったので, この絵は自分の理想なのかな」,

という回答が比較的多く得られたためである。その人が持つ、一般的な母親に関する信念や理想の裏にある、叶わなかった願望、満たされなかった欲求が反映されるという視点も取り入れる必要があるだろう。高橋・高橋(2010)は、人物画に描かれた姿が「理想像や不安像のような空想された姿を表す」可能性を指摘し、Gillespie(1994:松下ら,2001)も現実よりもむしろ願望や空想が描かれる可能性について、描画と夢の類似性を指摘するとともに、「子どもが聖母マリア像を描くように、防衛とか、理想化された表現を取るかもしれない」と述べている。以上のことから、理想化や防衛の裏に隠れた不安や葛藤があることを検討する必要があることを強調する。

(2) 母子画と面接内容の結果及び考察

先に、表情、身体接触、アイコンタクトについては、PDIで得られた報告から馬場(2005)の解釈仮説の検討を行った。その後、母子画に母子関係と対象関係がどのように投射されるかどうかを検討するために、母子画に表現されたパターン及びその母子画得点による分類、母子画に関するPDI指標の結果と、面接で語られた母子関係と対人関係についての語りから検討を行った。ここでは、これら個別的検討によって得られた、母子画への母子関係と対象関係の表象内容に関する考察を記述する。

種類：同一化の問題

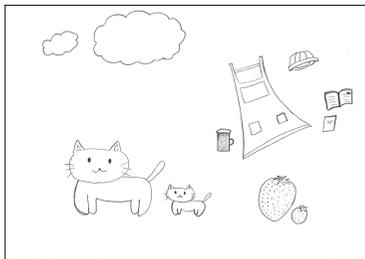


Fig. 2 Aさんの母子画

母子画にはあらゆる種類の自己認知や他者の受け止め方が反映されている(Gillespie,1994:松下ら,2001)が、人間を描くことをせず、動物や抽象的表現をすることは、母と子の関係の中に自己を投射することへの回避的傾向があると考えられ

る。高橋・高橋(2010)は、漫画的あるいは抽象的表現によって人物画を描く者について「人間関係に不安を抱いていた、自己概念が曖昧であったり、他者へ敵意を抱いていた、人間関係を回避しがちなことが多い」と述べている。これを参考にすると、母親との関係において不安感を持ち、人間関係においても、他者へ敵意を抱いていた、回避する傾向を持っていると考えられる。また、自己概念が曖昧であることは、自己の内なる「母としての自己」と「子としての自己」が表象されるという仮説(馬場,2005)から母親への同一化が困難な場合があると推測できる。

ここで、ある協力者のPDI及び語りを見ると、「母の考えている事」で「不安」を述べ、「親しみを感じる対象」についても「常に不安に思うことが一杯あるので」とその理由を述べていることから、上記の解釈仮説の通り描画者が「不安感」を抱いていることがわかる。母子画には描画者の母子関係及び母子関係に基づいて築かれた対象関係が投射されるとするならば、その「不安感」は母子関係と現在の対人関係の中でも存在していると考えられる。対人関係においても、自分の内面に「踏み込まれたくない部分が大きく」、「少しでも入れられそうになると、話を逸らしたり、煙に巻く様な感じにしていた」、「深く関わることをしづなかつた」ということから、他者との親密な関係を回避する傾向があると言える。親密な関係を築くということは自己の存在を脅かす脅威・恐れ・不安であるとして心の中に構築されたのではないかと考えられる。

また、母親に対する気持ちについて、小さい頃は「あまり好きではなかつた」こと、「曖昧でモヤモヤ」した気持ちであったこと、「母のようにはなりたくない」と述べていることから、母親への同一化が困難であったことが示唆され、一見性別のわかりにくい動物の母子像を描いたことも、これに由来すると考えた。そして、動物の母子像にみられる母親への同一化の問題が曖昧な自己概念、すなわちアイデンティティ確立の課題へとつながることが示唆された。

“やや安定”型の母子画に見られる母子関係と対

人関係

1) <母子笑顔／抱く／アイコンタクトなし> :
包み込まれる子ども

「表情は描画に投映された心の内容(感情) (馬場, 2005)を表すと考えられる。「母子笑顔」の母子像を描いた者のPDIにおける“母子の考えている事”では「一緒に居られて嬉しい」や「楽しい」、



Fig. 3 Bさんの母子画

「喜んでいる」、「安心感」、「愛おしい」など肯定的な情緒表現が多く見られた。内在化された母親像も子ども像も“笑顔”で居られるような安定感が漂っている。その表情からは、子どもと母親に投映される情緒が安定していることがわかる。

しかし、母親関係において「甘えたい時に甘えられない」、「言ってもわかってもらえない」という言葉からは、その時に抱いていた感情を表現することに難があったと考えられる。また、ここに分類される協力者の対人関係では「かまってほしいけど、かまってほしいって言えない」や「避けたり極力関わらないようにする」ことが語られ、現在の対人関係においても自分の感情を表現することを抑止、あるいは避けてしまう傾向がみられた。

ここで、母子のコミュニケーションや交流を表す身体接触とアイコンタクトを見ると、<抱く／アイコンタクトなし>となっているが、“抱く”ことと“アイコンタクトなし”ということがどのようなことを意味しているのだろうか。“抱く”母子像は、子どもが母親の腕の中に抱えられ、「抱える―抱えられる」関係にある。母親が子どもを“抱く”行為は“手を繋ぐ”ことよりも「母親主体的行為」(馬場, 2005)であり、子どもは受動的な態度であると言える。そして、“アイコンタクトなし”ということから、子どもが母親の主体的行為を素直に受け入れられているのかは不明であり、構図的に背を向け、対面的なメッセージのやり取りができていないように考えた。

“抱く”が「抱えること」を象徴しているのでは

ないかという予測(馬場, 2005)があるが、「抱える」ということには、外的な刺激から守られ安全な内的空間として機能する側面と、自分を呑み込み包含するネガティブな側面を含んでいる。やまだ(1996)は「つつむ(包む, 慎む)」とは「人の感情や表情を内に抑えて、外に現れないようにするという意味」があるとしていることから、自分の感情を表に出さない一面があると推測した。また、馬場(2005)によると、肩に手を伸ばし子どもを抱く母子画も、母親が後ろから両手で抱くことも、同じ“抱く”に分類されているが、上記した「抱える―抱えられる」関係すなわち母子画では重なり合って抱く関係と、横並びで(肩を)抱く関係では、その対象関係は異なる可能性が示唆された。

2) <母笑顔・子非笑顔／抱く／母→子> : 両価的な感情の受け入れられなさ

“抱く”身体接触でも、表情が母子で不一致かつ母からのアイコンタクトがある母子画の場合はどうだろうか。母親は「自分の中の全て」で、「お母さん大好き!」「近くにいないと嫌だ!」と足にしがみ付きに行っていたことや、よく「抱っこされ」、「安心感や「温もり」のイメージである一方で「冷たい」イメージの混在などアンビバレントな母親からの関わりを示す語りがあった。この両価的な感情の語りは、“母笑顔・子非笑顔”である場合、「描画者の心的世界が笑顔の示す感情と非笑顔が示す感情が混在した不安定な状態である」(馬場, 2005)という解釈仮説を支持するものであった。

また、幼少期の「突き放されるような感覚」の体験、「くっ付きたかったけどくっ付いちゃいけないのかなど戸惑い」の体験は、母親像が子ども像を見つめ、子ども像は見つめ返さない<母→子>のアイコンタクトに象徴されたと考えられる。つまり、母親から投げ返された感情を子どもが受け入れられないことを意味すると言える。

そして、対人関係にみると、関係性が壊れることを恐れて「同調」することで「受け入れ」てもらおうと考えるとのことであった。母子像の身体接触は「肯定的なコミュニケーションや心の絆、内的対処の結びつきを象徴するもの」(馬場,

2005)との仮説があるが、ここに、「大好き！」の裏のしがみ付き、縋り付くほどの想い、不安定な母親像に対してどこかへ行ってしまう不安が内在化された可能性を示唆した。

3) <母笑顔・子非笑顔/手を繋ぐ/母⇄子>: 母の顔を見上げる子ども

手を繋ぎ、アイコンタクトも母子相互になされるという母子の交流が見られる一方で、母子の表情が不一致な母子画が確認された。この母子画からは、子どもが母親に向けて大きく口を開け、一心に母親からの何かを求めているようにも考えら



Fig. 4 Cさんの母子画

れた。ある協力者は、自分の友だちや、きょうだいたちの中で母親を巡って、「嫉妬心」を抱いたり、「何で私の方を見てくれないのか」という思いを抱えていた。いわば、母親を独占することが出来なかった、母親と2人だけの時間を十分に取ることが出来なかったと考えられる。そして、対人関係の中でも「この人は絶対に私を捨てないという安心感」を持てる親しい友人を巡って「嫉妬心」を感じることもあるという。

ここで、北山(2005)はその著「共視論」において、「上位の母と下位の子ども」という上下関係で描かれた母子像について、土居健郎の「甘え」に関する知見を参考に、子どもの「甘え」を示すものとして論じている一考がある。それは、「甘え」の発音に食べることを意味する「ウマウマ」という乳児語の名残を見出し、「甘え」の意味を乳児のオーラルで未分化な体験に向けてさかのぼらせ、更に、マの発音が通常、顔を上に向けて口を開いて発音され、顔を下に向けては発音しにくい体験的な事実から「甘え」を示す側は下から上に向いているのであり、求めるものは上からやってくると期待しているようだ(北山, 2005)としている。

北山(2005)の解釈を参考にすると、口を大き

く開けて母親を見上げる子どももまた、母親からの「甘やかし」を求めた行動であると理解できる。「甘える」ということは、母親が子どもに接近して「甘えさせる」という積極的な適応を誘発させることでもある(北山, 2005)。Cさんの例に立ち返ると、嫉妬とは羨望に基づいた「主に愛情に関係していて、当然、自分のものだと感じていた愛情が、競争者に奪い去られたか、奪い去られる危険があると感じること」(Klein,1975: 小此木,1996)であり、当然と思っていた母親の「甘えさせる」という適応を十分に獲得できなかったことが大きな口を開けて求め続ける子ども像に象徴されているのではないかと考えた。

“ふつう”型の母子画に見られる母子関係と対人関係

1) “手を繋ぐ”と“非接触”の比較：ほどよい繋がりからの自立

ここでは、身体接触の特に手を繋いだ状態と手を繋がらない状態の意味について考察を述べる。母子像の身体接触は肯定的コミュニケーションや心の絆、内的対象の結びつきを象徴するものであり、母子像の表情が一致していると同時に身体接触が描かれている場合は、基本的に安定した養育環境に育っており、自他への信頼感や肯定的な感情が育まれている(馬場, 2005)と考えられている。しかし、PDI指標において、“手を繋ぐ”母子像と“非接触”の母子像とでは、“母子の行為”として母子共に何かをしている、交流のある回答が得られており、とりわけ目立つ差は見られなかった。

ここで、“手を繋ぐ”→“母からの接触”→“非接触”の順で面接における母子関係と対人関係について概観する。“手を繋ぐ”母子画を描いた人は「ちゃんと愛されている」感じ、「温かい」、「信頼できる」「安心感」という肯定的な言葉で表現され、“母からの接触”の人は「普通に良い母親」で「好きなようになんでもやれば」と背中を押してくれる母親だったと語っており、安定的な母子関係であったと言える。

そして、“非接触”の人もまた、母子関係は「絶対的な存在」「いなきやいけなかった存在」とあるように、母との関係の「繋がり」の強さ」と信じ

て頼れる存在であったと言える。馬場(2005)はこのパターンの母子画を描く人について、「母親から無視されたり、拒否された体験が多く、他者との関係を回避する内的作業モデルが形成された人である」と解釈しているが、この解釈仮説は支持されず、本研究からは、非接触について、安定的な母子関係を経て、母親から手を離して自立した子ども像の象徴という一面もあるのではないかと考えた。

その理由の一点目として、“非接触”の母子画を描く人に共通して見られたことが、幼少期、児童期は、母親の言うことを「信頼して疑わず」「何か言われたら頷くしかない」関係であったが、中学生頃から自分自身の意見を持ち始め、今では「一人の人間」あるいは「対等な人間」として見ることができていると語ったことである。そして二点目は、“手を繋ぐ”母子画を描いた人には友人関係は良好であると答える人もいれば、「無意識に距離を開けちゃう」、「境界線がある」、「良い距離を保ちたい」という語りをする人もいた一方で、“非接触”の母子画を描いた人は現在の対人関係に概ね満足しており、対人関係に母親との関係が繋がっている感覚がないことであった。以上のことから、非接触は、子どもが母親から手を離れた状態とも取れ、内なる自己としての子ども像が自立できていることを表す一面もあると示唆した。また、“ふつう”型における“非接触”の母子像を描いた人のPDIで子ども像の年齢に「12歳」、「21歳」と答えたことから、子ども像が成熟してきていることを指し、また同時に、母子画に投映される対象関係が幼少期でない場合は子ども像の年齢を考慮して身体接触の意味を解釈する必要があると言えるだろう。

2) <母笑顔・子非笑顔/手を繋ぐ/アイコンタクトなし>：統合されなさの象徴

Gillespie(1994：松下ら2001)は表情の不一致が描画者の心的世界がバラバラであることを示すと解釈しており、表情に現れるような他者との体験が心的世界に統合されずに存在していると理解できる。また、馬場(2005)は表情の不一致は回避的な内的作業モデルの存在を示唆するサインで

あるとしている。母子関係としては、ともに時間を過ごせることを楽しみにしている一方で、「怒ったりよくわからない部分がいっぱいあった」と語り、統合し切れない、いろいろな表情の人物が心の中にいたことがわかる。対人関係については「深く関われない」、「つき合い方が部分部分」であり、「1対1の付き合いが気まずい」と述べ、回避的な内的作業モデルが存在することと対象が統合されていないことが支持されたとと言える。

3) <母子非笑顔/手を繋ぐ/母→子>：笑顔になれない体験の象徴



Fig. 5 Dさんの母子画

馬場(2005)によると、非笑顔の母子像を描く人は、母親とのネガティブな体験が取り入れられたために、心的世界の母親や子どもが笑顔にならなかった人だと見なされる。いわば、非笑顔の表情は描画者のネガティブな体験の象徴であると言える。

例えばDさんは、子どもが「拗ね」、母親が子どもを急かす場面を描いたが、馬場(2005)の解釈仮説を支持するものであったと考えられる。幼少期から、母親の多忙さ故に「いつもいない感じ」を体験し、「自分のことは自分でやり」、「母に負担をかけないように」していた。しかし、「結局母親に迷惑をかけてしまう」という語りからは、母親との間で笑顔になれないような体験が重なったことが推測され、“非笑顔”に象徴されたと言える。そして子どもを急かす母親像もまたDさん自身であり、子どもとしての自分の甘えたい部分を我慢し、常に奮い立っていたのだろう。母親から投げ返された感情を子どもが受け入れられないことを、子ども像は母親像を見つめ返さない“母→子”のアイコンタクトに象徴されたのではないかと考えた。対人関係をみると、母親との関係と同

様に「何もできない自分がちっぽけ」に感じ、誰かに頼ることが難しいことは、母親との関係性が他者との関係の原点になり、自分自身と他者を信頼できず肯定的な感情を持つことが難しいことを示しているのではないだろうか。

4) <後ろ姿/手を繋ぐ/母⇄子>：自分の情緒を隠す傾向



Fig. 6 Eさんの母子画

後ろ姿を描いた者は、優しい一方で怒ると怖い母親の印象とその体験を語り、特にある協力者は母親に怒られた時の恐怖が印象深く残り、その時に「嫌われたらどうしようみたいな怖さ」を感じたとのことだった。対人関係に母親との関係が繋がっている感覚は見いだせなかったが、自分のことに干渉されることを望まなかったり、「面白くないことでも愛想笑いをする」、「壁を作ることもある」ことが語られた。こうした語りから、少なからず、自分の情緒を隠し、表に出さない傾向があるのでないかと考えた。馬場(2005)は“後ろ姿”を描く人に防衛感情が高いという特徴は見られなかったと述べているが、高橋・高橋(1991)は、後ろ姿の人物像は、本当の自分の姿を隠そうとする傾向や逃避的な構えがあることを意味するとしている。また、後ろ姿の絵に共通して時間帯が夕暮れ時で、母子像に影を描いたり、空に暗く濃淡をつけて描いたりしていた。高橋・高橋(2010)によると、影は不安を生じる葛藤の存在を表し、濃淡をつけて描くことは自我を保護する機制が働いており、不安や潜在的敵意を表すとされている。これらの解釈は、自分の情緒を隠し表に出さない傾向を裏付けるものであり、潜在的な不安や葛藤を隠しながら対人関係を築いている可能性を示唆した。

“やや不安定”型の母子画に見られる母子関係と対人関係

1) <母子空白の顔/手を繋ぐ/アイコンタクトなし>：感情表現の抑止



Fig. 7 Fさんの母子画

高橋・高橋(1991)によると、空白の顔を描く人は、引きこもりがちで本当の自分の姿を隠して外界と接触しようとする傾向や逃避的な構えがあることを意味するとされている。母子画においては、母親との間で本来の自分を見せることがよくないことだと感じ、感情表現を抑制し回避するようになった人だと理解される(馬場, 2005)が、本研究における“母子空白の顔”を描いた人の面接では、母親との間で「自分の本音を言ったら傷つけてしまうだろう思い言えない」ことを語り、母子画の中の母親と繋いだ手も離せないで居ることが語られた。これらの結果から、馬場(2005)の解釈仮説は本研究においても支持されたとと言えるだろう。

2) <母子非笑顔/非接触/子→母>：情緒的交流への恐れ

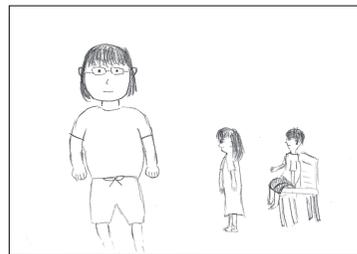


Fig. 8 Gさんの母子画

先述したように、母子ともに笑顔でない場合、母親との間で笑顔になれないような体験が重なったこと、その関係性が他者との関係の原点になって、他者を信頼できず肯定的な感情を持つことが難しいことが示唆される(馬場, 2005)。PDIにお

いて「ただTVを見ているだけ」というように、その活動性や創造性は豊かさに欠けており、非笑顔の場合は、空白の顔よりも笑顔になれない感情を否認しないで表現できる人である(馬場, 2005)とされているが、母子共に動作のみが表現され心情が言語化されなかったことが興味深い。また、対人関係については「話したいことがあるのに話せないまま終わってしまう」とあるように素直な感情表現や情緒的交流に困難さがあるようであった。

自己と他者との交流の観点でみると、子ども像が母親像を見つめ、母親像は見つめ返さない“子→母”のアイコンタクトは、子どもが投げかけた感情を母親が受け止めなかったことを意味する(馬場, 2005)が、母親から受け入れられなかった体験を取り入れた子どもは、他者に対しても自分から働きかけて受け入れられないことを恐れ、自分の欲求や感情を表現することに難しさがあるのではないかと考えた。この点について、空白の顔の人は感情を否認する傾向があり、非笑顔の人は感情の表現を抑止する傾向が強い可能性が示唆された。

4. 最後に

本研究からは、先行研究の少ない、アタッチメントに関連した対象表象をアタッチメント関係尺度でなく対象関係尺度の枠組みで客観的に捉え、青年期の対象関係の関連要因を幼少期の母子関係とIWMの観点から明らかにした。さらに母子画を用いて母子関係と対象関係について検討したことで、IWMと対象関係の関連をイメージや表象レベルから検討することができた。また、馬場(2005)の解釈仮説に加えて新たな解釈仮説の可能性を提案し、母子画の質的研究の発展に寄与するものと考えた。

精神療法だけでなく、子育て支援などで早期の母子関係に関心が寄せられている現代では、母子画が利用される領域が広がることが考えられる。本研究の結果より母子画から幼少期の母子関係だけでなく対象関係の在りようも同時に検討することができ、母子画のアセスメントとしての臨床応

用が期待される。精神療法で度々取り上げられる過去の母子関係をアセスメントできると同時に、母子関係を基盤として形成された対象関係のアセスメントができ、さらにはクライアントとセラピストの関係性を予測できる方法であると期待できる。特に、量的研究及び質的研究からアンビバレントな母子関係とアンビバレントなIWMを持つ人はその後の対人関係にも影響を及ぼすことが示されたため、表情が不一致な母子画やアイコンタクトが一方通行である母子画、極端な理想化が母子画や面接にみられる場合は注意して支援を行っていく必要があると言えるだろう。

今後は、本研究以外の媒介変数を取り入れながら、解釈仮説の妥当性・信頼性を高め、母子画の利用される領域が広がることが期待される。本研究においては、第一研究で青年期の対象関係の関連要因としてIWMを媒介変数として取り入れたが、本尺度(戸田, 1990)の信頼性・妥当性には課題が残り、今後はIWMの尺度の精度を十分に検討すること、新たな媒介変数を取り入れることが必要であると考えられる。例えば現在の母子関係や過去・現在の対人関係の検討が有効となり得ることが本研究から示唆された。

本研究では母子画の個別的な検討を重視してきたが、母子画の臨床応用のためには量的な研究もまた重要であり、更に幅広い年齢層への実施が必要であると言える。母子画の研究はまだまだ数が少なく、母子画が投映法として広く利用されるためには、量的な研究が行われ、発達段階に応じた母子画の典型例が示されることが重要である。母子画のような描画法は、量的に処理することが難しく、大人数から母子画を集めることも容易ではないが、今後、調査協力者の十分な確保や量的指標、解釈仮説の検討が必要であると言える。

謝辞

本研究のすべての過程において、親身なご指導および助言をしてくださった土沼雅子先生、そして本研究を進めるにあたって、出会い、かかわってくださったすべての皆様にご心より感謝申し上げます。

引用文献

- Ainsworth Mary D. S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S 1978 *Patterns of Attachment: A Psychological Study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 青柳肇・酒井厚 1991 「アダルトアタッチメントと回想による幼少期のアタッチメントとの関係」『早稲田大学人間科学研究』, 7-16.
- 馬場史津 1997 「Mother and Child Drawingsの基礎研究」『社会精神医学研究所紀要』 26.30-36.
- 馬場史津 2005 『母子画の基礎的・臨床的研究』 北大路書房.
- 馬場史津 2003 「母子画の基礎的研究—成人版愛着スタイル尺度との関連から」『臨床描画研究』 18.110-124.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss: Vol.1: Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss: Vol.2: Separation, Anxiety and Anger*. New York: Basic Books. (黒田実朗・岡田洋子・吉田恒子1977 母子関係の理論Ⅱ：分離不安 岩崎学術出版社.)
- 土居健郎 1993 『注釈「甘え」の構造』 弘文堂.
- 土居健郎 1998 「「甘え」概念の明確化を求めて—永山恵一の批判に応える」『精神神経学雑誌』 60.
- Field, T 2001 *Touch*. Cambridge: The MIT Press.
- 藤井優子 2010 「母子画を利用した面接法の検討」『山口大学大学院教育学研究科付属臨床心理センター紀要』 1, 51-61.
- 小此木啓吾・北山修・牛島定信・狩野力八郎・衣笠隆幸・藤山直樹・松木邦裕・妙木浩之 2002 『精神分析辞典』 岩崎学術出版社.
- 井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子 2006 「日本における青年期用対象関係尺度の開発」『パーソナリティ研究』 14(2).181-193.
- 井梅由美子 2011 「青年期女子の母娘関係と対象関係」『東京未来大学研究紀要』 4.27-35.
- Gillespie, J 1994 *The Projective Use of Mother-and-Child Drawings: A Manual for Clinicians*. (松下恵美子・石川元 2001 『母子画の臨床応用 対象関係論と自己心理学』 金剛出版.)
- 数井みゆき・遠藤利彦 2005 『アタッチメント 生涯にわたる絆』 ミネルヴァ書房.
- Kernberg, O. 1976 *Object Relationships Theory and Clinical Psychoanalysis*. New York: Jason Arosen. (前田重治1983 『対象関係とその臨床』 岩崎学術出版社.)
- 北川恵 2006 「アタッチメント測定手法としての投影法の意義・成果・課題」『四天王寺国際仏教大学紀要』 41.1-14.
- 北山修 2005 『共視論 母子像の心理学』 講談社.
- 木下康仁 2007 『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法—修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチのすべて—』 弘文堂.
- Melanie Klein 1975 *The Writings of Melanie Klein Vol.5 (1957-1959) Envy and Gratitude and Other Works*. The Melanie Klein Trust (小此木啓吾・西園昌久・岩崎徹也・牛島定信 1996 『メラニー・クライン著作集5 羨望と感謝』 誠信書房.)
- 小林隆児・遠藤利彦編 2012 『「甘え」とアタッチメント 理論と臨床』 遠見書房.
- 松木邦裕 1996 『対象関係論を学ぶ』 岩崎学術出版.
- 松下姫歌・岡林睦美 2009 「青年期における愛着スタイルと母子イメージとの関連—質問紙と母子画を用いての検討—」『広島大学心理学研究』 9.191-206.
- 小此木啓吾・渡辺久子 1989 『別冊発達9 乳幼児精神医学への招待』 ミネルヴァ書房.
- 酒井厚 2001 「青年期の愛着関係と就学前の母子関係 - 内的作業モデル尺度作成の試み」『性格心理学研究』 9(2).59-70.
- 高橋雅春・高橋依子 1991 『人物画テスト』 文教書院.
- 高橋雅春・高橋依子 2010 『人物画テスト』 北大路書房.
- 戸田弘二 1990 「女子青年における親の養育態度の認知とInternal Working Modelsとの関連」『北海道教育大学紀要』 41(1).91-99.
- やまだようこ 1996 『私をつつむ母なるもの』 有斐閣.